

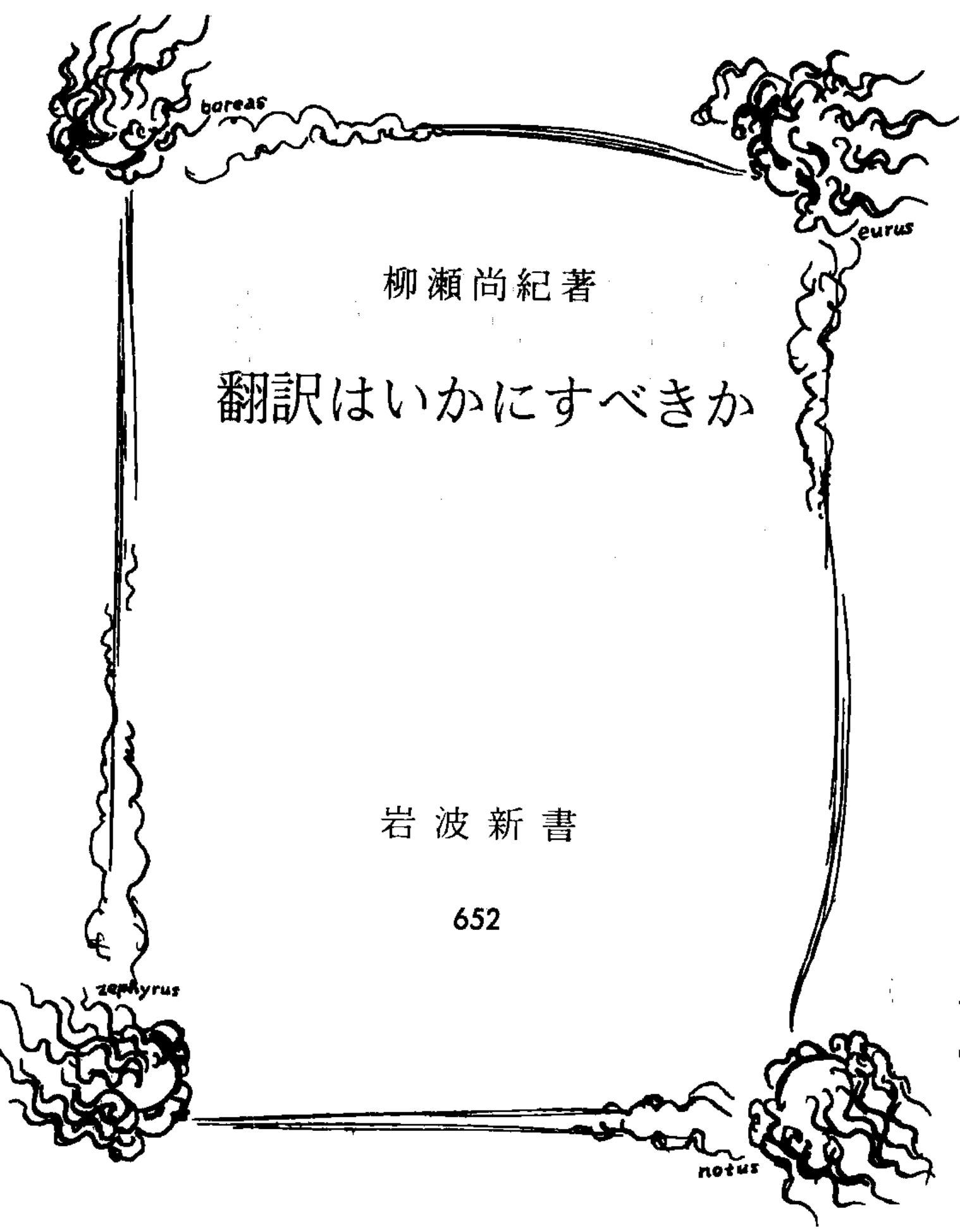
柳瀬尚紀著

翻訳はいかにすべきか



岩波新書

652



柳瀬尚紀著

翻訳はいかにすべきか

岩波新書

652

柳瀬尚紀

1943年根室市に生まれる

1970年早稲田大学大学院修了

現在—英文学者、翻訳家

著書—『ジェイムズ・ジョイスの謎を解く』

『広辞苑を読む』

『翻訳は実践である』

『辞書はジョイスフル』

『フィネガン辛航紀』

『翻訳困りっ話』

『対局する言葉』(共著)ほか

訳書—ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク

I・II・III・IV』『ユリシーズ』(刊行中)

ボルヘス『幻獣辞典』

D. バーセルミ『雪白姫』『死父』『王』

ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』『もつれっ話』

エドワード・リア『ナンセンスの絵本』

D. R. ホフスタッター『ゲーデル、エッシャー、

バッハ』(共訳)ほか

翻訳はいかにすべきか

岩波新書(新赤版)652

2000年1月20日 第1刷発行

著者 やなせ なおき
柳瀬尚紀

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・理想社 カバー・半七印刷 製本・中永製本

© Naoki Yanase 2000

ISBN4-00-430652-3

Printed in Japan

目次

序章	1
----	---

一国さを貫く 2

竈猫の実践 5

翻訳は細部に宿る 8

第一章 翻譯は如何様にすべきものか	11
-------------------	----

輕快にして細心 12

習いたてのピアノ 17

辞書語と翻訳 20

『血笑記』——血も滲む推敲の跡 25

はじめは下に居た 29

時制自制症の克服 33

彼と彼女と呼びかけ語 38

足と膝、全身と肩 46

誤植余談 50

第二章 小砂眼入調 53

続「あいびき」 54

「三人冗語」と「雲中語」 56

「トウコギ」と「とうこぎ」 60

粗漏と精細 62

「三人冗語」「雲中語」の翻訳批評 65

情實翻訳批評 68

小砂眼入調現代版 75

英和辞典語翻訳 79

耳にとどく文節 99

第三章 翻訳の姿勢 107

翻訳は不朽の業 108

第四章

『ユリシーズ』翻訳

135

精読の愉悦 112

書淫の怪物 116

もう一人の怪物 119

精読と省略 122

鼎訳の猫と猫訳の猫 136

頭黒の小用 140

覆いの掛った蹄訳 145

鼎訳と猫訳の点検 149

翻訳は趣味ではない 155

可哀そうに…… 163

《俺》の出番 170

第五章

無理の愉悦

179

無理がジョイフル 180

三島由紀夫のフィネガン翻譯 186

恩師・加藤郁平 191

日本語という天才 196

余が翻譯の標準…………… 206

あとがき…………… 211

序

章

一 国さを貫く

翻訳という語は、筆者にとって、あくまで日本語である。翻訳という行為を、あくまで日本語の行為として考える。筆者が翻訳と言うとき、それはたとえば translation, traduction, Übersetzung, traducción, traduzione といった英仏独西伊のいずれの外国語をも念頭においていない。

もちろん翻訳という語も行為も、外国語があって初めて成り立つ。それを承知で言うのだ。翻訳は、日本という一国での営みである。

もっとも外国で翻訳を読む読者があるし、外国で翻訳の原稿用紙を埋めた経験が筆者も一度ならずあるから、厳密にはこう言うべきだろう。翻訳は、日本語という一国語の圏内における営みである、と。

行為だ営みだと、もったいをつけずに言おう。

要するに、翻訳は日本語の問題である。結局は、それに尽きる。

三島由紀夫は『文章讀本』の中でこう述べる。

一般讀者が翻譯文を読む態度としては、わかりにくかったり、文章が下手であつたりしたら、すぐ放り出してしまふことが原作者への禮儀だらうと思はれます。日本語として通じない文章を、ただ原文に忠實だといふ評判だけでがまんしいしい讀むといふやうなおとなしい奴隸的態度は捨てなければなりません。

『三島由紀夫全集』第二十八卷、新潮社

三島のいう「翻譯文」が、つまり日本語が、重要なのだ。外國語を相手にして二國語間を往復し、しかし仕上げて公にする翻譯とは、日本語という一國語の表現である。一國語の質の善し悪しがすべてだ。翻譯した外國語の原文を言訳いいわけに持出して泣言なきことを並べるのを、しばしば見かける。翻譯者が「翻譯文」として自立していないものを世に送り出したことを懺悔ざんげしたところで、それはただたんにみつともない。

そういう一國語主義者であるからして、本書では translation や traduction といった話はない。話のついでに英訳や仏訳を援用することもあるが、その場合は、それが翻譯に、すなわち日本語の問題にかかわると考えるからである。

序 章 もちろん一國語主義者として、translation 論や traduction 論にまったく無知なのではない。

一つだけ例を挙げれば、十九世紀のイギリス詩人・批評家マシュー・アーノルドに *Translating Homer* というホメロスの英語訳を論じたものがある。百六十頁のこの英語本は、

この種のもので筆者が丹念に読んだ一冊だ。

ホメロスは進展が迅速であり、語と文体が平明であり、想念が素朴であり、作風が気品高い、と、マシュー・アーノルドは断じる。十七世紀のジョージ・チャップマンによるホメロス英訳に不満を語り、チャップマン訳へのソネットの頌歌を書いたジョン・キーツを、原典が読めないのに英語訳を判断できるはずがない、と、切って捨てる。

なんらかの示唆を得ないわけでもない。しかし論じられているのは translation なのであって、翻訳ではない。本書では、外国人の translation, etc. 論をあれこれ紹介することはしない。実際、筆者の内部で、そうした知識はたんなる知識にとどまる。自分自身がホメロスへの一つの接近として読んだ本だからだ。

木下杢太郎の『浴泉歌』という詩集に、こういう行がある。

マラルメの美しき句章をトルストイは不可解と罵った。なんとトルストイの「國さよな。

（「珈琲壺と林檎と」）

広辞苑には、

【一刻】②「一国」とも書く）頑固なこと。人の言を聞かず、腹立ちやすいこと。

むろん、李太郎の用いている「二國」はこの意味だ。そして本書は、翻訳とは日本語という一國語の問題であると主張する点で、一國さを貫く。

竈猫の実践

一國といえ、幸田露伴に「一國の首都」という格調高い評論がある。

これを読んでいたら「都人士」^{とじんし}つまり東京人の「竈猫」^{かまどねこ}「穴蛇」^{あなへび}の陋習^{ろうしふ}というのに出会^{でくわ}し、苦笑した。筆者は都人士の意識はほとんどないが、「竈猫」といわれると当たっている。まずめったに外へ出ない。

もともと竈のある家に暮しているのではないから、「夜這蠅螂」^{よばいかまきり}とでもいったほうがよからうか。深夜、この狭い書斎でがさごそかさこそ本をめくり、がたごとかたことキーボードを叩く。

章 本をめくりキーボードを叩いて何をしているかという、翻訳をしたり、たいていはなにかと当り障りのある文章を書いたり、あるいはこの今は、翻訳について書いている。

序 翻訳について書いてはいるのだが、しかしすでにこれまで機会あるごとに活字にしたり話し

たりしたように、筆者は翻訳は実践であるという立場に立つ。したがって本書は、本書そのものもまた翻訳の実践であるようなものとなるであろう。むしろ、それを意識しつつ書く。

翻訳は実践であるという立場に立つから、翻訳書を読むときも、たぶん大方の読者よりも翻訳文が気になる。困った癖だ。

さきほど引いた木下杢太郎の詩にトルストイが出てきたので、『戦争と平和』（新潮文庫）の翻訳を引く。「エピローグ」から。

ナターシャは一八一三年の早春に結婚した。そして一八二〇年にはもう三人の娘と一人の息子の母になっていた。この男の子は彼女がほしいと念願していた子で、いまは自分の母乳で育てていた。彼女は肉がつき、幅も広くなり、この強い母に昔の細い敏捷なナターシャを見わけることはむずかしいほどだった。顔の線がはっきりきまって、落着いた柔和さと明るさの表情をもっていた。その顔には、昔のように、彼女の魅力をつくっていたあのたえず燃えたつ生命の火はなかった。いまはよく目につくのは彼女の顔と身体だけで、心はほとんど見えなかった。

誤解のないよう心からお願いする。決してケチをつけるとか、あら探しをするとか、そーい

う卑しい魂胆は微塵もない。これは読者がふつうに不満を感じないで読むことのできる翻訳だ。

しかし、筆者が現時点で、現段階で、こういう実践をするかと問われれば——というより、つついっという間いかけを自分に向けてしまう困った癖が頭をもたげ——残念ながら首をふる。

「この男の子は彼女が」とあり、「おや、どの女？」と前に戻り、ナターシャしかない。これにかぎらず、彼女、彼女を繰返す必要があるのかどうか。

乳母を雇わなかったのを伝えたいのは分るが、「自分の母乳で育てていた」とまで強めなければならぬのかどうか。

「明るさの表情」とあり、ならば昔のナターシャには明るさがなかったということだろうか。「よく目につく」とあり、これはしばしば目につくということなのか。

ロシア語が読めないから、早くも英訳を援用しなかった。英訳を読み、ある人にロシア語原文の教えを受け、この部分の翻訳をもし筆者が実践するとすればこうなる。

ナターシャは一八一三年の春先に結婚し、一八二〇年には娘三人のほか息子一人の母となっていた。念願のこの男の子を、今、自分の乳で育てていた。ぐっと肉がつき、横幅も

ひろがり、この遅しい、いかにも母親然とした女には、かつての細身の、少しもじっとしていないナターシャの面影が仄見えほのみすらしめない。顔の輪郭がしっかと定り、物静かで柔らかな、澄んだ表情になっている。その顔には、かつてはそこで燃え立ち、その魅力となっていた炎眩いほのおまはゆ生氣がちらつきもしない。今や顔立ちと体つきばかりが際立ち、魂は見えないのだった。

翻訳は細部に宿る

どうかほんとうに誤解のないように願いたい、と、もう一度記す。

勝手にしゃしゃり出て、たったこれっぽっちの行数を訳し直したからといって、厚手の文庫本四冊になる『戦争と平和』翻訳をいささかもけなしているのではない。そもそも『戦争と平和』を筆者はこの翻訳で読んだのであり、英訳は全頁を通読しておらず、ただたんに所有しているだけだ。そしてふつうに日本語を読める読者なら、この文庫本四冊をなんら苦痛なく読み通すことができることを、訳者の名譽のために言っておく。

自分も翻訳者の端くれであるだけに、実は内心、自分にこうつぶやくのだ。「それならおまえが全編を訳してみろ」と。もちろん、それはできない。

にもかかわらず、上に示したように、頭の中で訳文を書き変えながら読まねばならない箇所

もあつたのは事実だ。その一例を引いて細部にこだわったのは、翻訳は細部の積重ねだからである。

翻訳は細部に宿る——そんなふうにも思う。

だからこの細部に関するかぎり、上に呈示した改訳に、よく見かける「試訳」という衣を着せるつもりはない。試食会とか試飲会とかいう。どちらも貧乏くさい。試案、試作、試着、試聴、試用という語もある。いずれも腰が据わっていない。呈示したからには、呈示した時点で決定稿だ。

そしてまた、翻訳の進歩ということを筆者は漠然と信じている。少なくとも、仕上げて活字にし、印税を手にする一冊ごとに、翻訳が良質になっていなければならないと思う。昨日よりも今日のほうが、たとえほんのほんのわずかでも上昇していなければならないと思う。ほんのほんのわずかの上昇は、細部へのこだわりによって可能になるのではあるまいか。

